

# 教育行動の重層性



坂元彦太郎

へ 1 へ

幼児の教育の場合について考えてみよう。教師が子どもたちを教育し、子どもたちはその中で何かを身につけていく、そのひとつひとつのことを教師の側から見て「教育行動」と名づけてみた。子どもたちの側からみれば、これはそのときそのときに前にぶらさげられた網にやみくもにぶつつかって、からだにひっかかる網の目みだいなものであつて、見通しだとか、計画だとかいうようなものはほとんどないであらう。子どもたちは、そのときそのときの遊びや仕事に、夢中になつたり、ときに飽きがきたり、この遊びや仕事からどういふ目的のためになされているかはほとんど考えないであらう。子どもなりにそれぞれの活動を解釈はしているが、(汽車)

っこしているときは汽車ごっこをしているだけだし、砂場でダムをつくっているならそれだけのことを考えている。

しかし、教師の側になつて、その教育行動は幾重からの層から成り立っている。子どもが自分たちで汽車ごっこをはじめて夢中になっている場合でも、教師が自分からのり出して子どもたちをじかに汽車ごっこに誘導した場合でも、この汽車ごっこという活動を表面に見せている事態は、その奥に幾重ものこんたんやつもりをかくしている。教師が子どもたちをそのように動かしているこんたんには、人により場合によりさまざまながいがあるであらうが、いずれにしてもこうした重層的構造から教育的な行動ができていくことは疑いのないところである。

こうした、有機的といってもいくらいに一体的になっている教育行動のいくつかの層を、強いて分析してみることにしよう。

先ず、いちばん表面の層は、すでに書いたように、「活動」とよぶことができよう。汽車ごっこの場合、砂場あそびの場合、外から見えて見える限りのこどもたちの動きをいうのであり、それ以上のものでも、それ以下のものでもない。そして、この活動が、こどもにとっては、すべてであって、こどもの個々の実情や興味に応じていて、こどもたちの百パーセントの没入をいざなうことができれば、一応、それでいいのである。

しかし、教師の立場からみると、そういう活動をさせている何かのこんたんかつもりがある。この層を普通「目標」とか「めあて」とかよんでいることはいうまでもない。同じ汽車ごっこをさせる場合でも、たとえば、大いに身体運動をやらせて筋肉の発達をはかる、というつもりの場合、交通安全の習慣を養おうとする場合、汽車に関するかんたんな理解をもたせようとする場合、といったさまざまな場合があるであろう。こどもはわからなくても、教師がこのうちのいずれか、あるいはいくつかをあわせて、ねらっているときには、おのずから活動の姿にちがいがでてくるはずである。活動の

ある断面だけでなしに、いくつかの連続をした場面を見れば、その教師のねらいが外からもうかがわれるようになる。裏からいえば、ある特定の目標を達成することは、活動のある形態を持続させるか変化させるかの経過のなかで果されるということである。

こうした、活動と目標との力動的な重層性において、さらに、いま目標といわれているものの中に、二つの種類もしくは二つの層を区分することができる。

一つは、ある活動のうちに、内容的なものを身につけさせようというこんたんである。いいかえれば、はっきりとある特定の内容理解や技能の修得がねらわれるのである。汽車ごっこの場合、汽車の運行や車掌の任務などについて、幼児なりの把あくをめざしている場合である。昔流の教育学的用語でいえば、いわば実質的な陶冶が意図されているのである。

いま一つの方は、その活動のなかで、昔流のことばでいえば、形式的な陶冶がもくろまれているときである。あまりはつきりとした形をとらないような、態度や心情などをしぜんになしなおうというわけであって、前のねらいを、内容というならば、これは、狭義の目標といっていであらう。

こういうことになるので、目標ということばを広狭二義に使うことになるので、広くひっくりかかるといって、内容

と対していうときに目標ということばを使うことにしよう。

へ 3 へ

ところで、今の幼稚園教育要領と、小学校などの学習指導要領を比較してみると、しごく大ざっぱに言えば、小学校では「内容」が明示してあるが、幼稚園の場合はそれが示してないのである。ただ「望ましい経験」としてもろもろの事項が列挙してあるが、この望ましい経験というのは、すこぶるあいまいな、まぎらわしい表現である。よく調べてみれば、私がいま分けてみた、目標もあれば内容に傾いたものもある、さらに活動としか思えないものがならんでいる。しかし、全く無系統ではないのであって、幼稚園教育の伝統に育った教師たちの身近かな経験をもととして、それに近い層や面をとりそろえているのである。論理的には混乱していながら、この雑然としたならば、かえって、わが国の幼稚園教育の休臭のよいなものが感じられるのである。いうなれば、活動も目標も内容も、そんな区別など気にかけないで、なりふりかまわずにこどもの中にまみれこんでしまっている。真から善良な幼稚園教師気質である。

少し脱線してしまったようである。話をもとにもどそう。大ざっぱに言えば、小学校にくらべれば、幼稚園では内容のことは確定的

に指示されてはいないのである。だから、私たちは、一応、つぎのように考えている。――幼児の教育には、きまった内容がない、すなわち、固定した教育課程のわくがきまっていない。だから、大幅な自由で、保育に関することを教師がえらび、定めることができる、と――

たしかにそうである。しかし、だからといって、「内容」のことは全く考えなくてもいい、ということではない。幼児には幼児なりにつかむのがのぞましい内容というものはあるはずである。そして幼児の場合には教師が定める幅がずっと広いとはいえないもの、しかし、人間形成という大きい目的が共通である以上、おのずから多くの幼児に共通なものがあるはずである。

ただ、何となしに固定的な内容を避けるものだ、という気分が一部のまじめな先生たちの間にある。たとえば、幼稚園では文字を教えないがいい、数も教えないがいい、きまった知識などは授けなくていい、もっと幼児たちには幼児らしいきまぎまな活動、遊びなどをさせる方がいい、というような、むろん、決してまちがってはいない考え方をしている先生が多いのである。

へ 4 へ

私は、この点についてこのように考えている。たとえば、年長の

幼児で発達が順調である場合、相当な程度の知的なことが身につけられるようになっていて、いわばそれを教えればじゅうぶん学びとることができるのである。ところが、私もまた「だから、文字や数を教えていいのですよ」ということにはちゅうちょを感じるのである。

というのは、ある内容を、つねに一定の活動と結びつける癖があるのを、私たちのまわりに見出すからである。数のことが幼児にふさわしい程度にわかる、ということ、すなわち、そういう教育行動の「内容」という層だけをとりだせば、決してわるいことではない。ところが、それを、小学校での教え方と思われているような、一斉の詰めこみという形で、そういう活動をこどもたちに強いることによって、この内容を身につけさせようとするのは必ずしもものぞましいとはいえないのである。むしろ、幼児にふさわしいような活動様式、たとえば幼児といっしょに遊んでいるうちにしぜん機会をつかんで数と実物との対応が身につくように導くことなど、適切に工夫して行なわれていいはずである。

また、社会的な諸事業などに対する理解の芽生えも、当然あっていいはずである。ただ、心しなければならぬのは、そうした内容がえられるようになる活動を固定的な一定したものと考えないことである。

これに対して、目標というのは、大体、態度や心情の育成にあたるのであって、この方面にやくだつ活動というものを、固定的なものと考える習慣はあまりできていない。それで、この方はあまり警戒をする必要はないようである。

だから、内容にはあまりこだわらないで、適切な目標を弾力的に追求し、それに適切な幼児らしい活動をまつわらせる、といったやり方が、やはり無難な考えだ、ということにおちつくであらう。

教育行動を重層的な力動的なものとして展開する、といったあまり耳なれない私のいい分であるが、まとめていえば、こどもたちを保育するときの、目標と内容と活動とはつねに相即的でありながら融通自在に結びつきかたが変るものであるということをよく心得ておくことがたいせつである。そして、もしできるならば、こどもたちには自由でかたつな幼児らしい活動をいとませながら、その奥にかくれている目標をつかみ、さらに、内容のこともわきまえて、つねに持続と変化のうちに、しぜんその目標の実現にみちびいていくことができるようでありたい。こうした教育行動の微妙な重層的な構造をそのままの姿で把あくし、活かしていくようでありたい。

\* \* \*